

2006年11月18日

第24回 鴨川義塾 特別講演

鴨川義塾・理事
大久保啓次郎

勝 海舟と福澤諭吉

皆さんこんにちは！今日は勝 海舟と福澤諭吉のお話を致します。タイトルを見て、何で勝が先で福澤が後なのかと思う方もいるでしょう。これには訳があるのです。二人とも明治維新（1868年）を基点としてそれ以前に30数年、それ以後に30数年生きているわけですが、明治維新より前に活躍した人は勝海舟で明治維新より後に活躍した人は福澤諭吉なのです。そんなわけで海舟を前に、諭吉を後にしました。ただそれだけの理由です。

「掃除破壊と建置経営」ということばがあります。古い体質のものを壊し、新しい体質のものを作ることです。（福澤諭吉が維新の時に言った言葉です。）

300年も続いた徳川幕府を倒すことに貢献した人の一人が海舟で、その後に新しい政府が出来てその中で、明治新政府を盛り立てた中心人物の一人が諭吉なのです。

二人は殆ど同時代を生きております。海舟は1823年生まれで1899年に亡くなりました。諭吉は1835年に生まれ、1901年に亡くなっています。ということは海舟の方が一回り上ということになります。

それなら二人で協力し合えば、もっと早く幕府を倒し、新しい近代国家を創立出来たのではないかと考えますよね。

ところが二人は仲が悪かったのです。犬猿の仲とでも言いましょうか。

二人の出会いは1860年に咸臨丸でアメリカに行った時です。

提督は木村摂津の守で、艦長は勝海舟でした。海舟は1853年のペリー来航の時に外国から国を守るにはどうしたら良いかという海防意見書を幕府に出してそれが認められて一躍出世致します。それから5年間長崎で軍艦操縦技術を学びます。木村は勝の上司でしたが、操縦は出来ませんでした。

福澤は本来咸臨丸の乗船員には入っていませんでしたが、つてを頼って木村に接触し、木村の従者としてアメリカ行きを認めてもらいます。

時に、海舟37歳、木村30歳、諭吉25歳でした。諭吉は舟の操縦も出来ず英語もまだろくに出来ないために、海舟は日夜諭吉に辛く当たりました。

木村も勝の横暴を止めることができませんでした。勝は船酔いがひどくいつも船室に閉じこもっていました。諭吉は船酔いもせずただ只管に勝の言う事を聞いておりました。勝はわがままで、自分の思うようにならない時はすぐさま

「バッテリーを下ろせ、俺は日本に帰る」と無茶な事を言って周囲を悩ませました。バッテリーというのは小船のことです。

咸臨丸は1月に出帆し5月初めに日本に帰ってくるのですが、この間100日以上諭吉は海舟にいびられます。二人の確執はこの時から始まったのです。日本に帰ってきてからは、海舟は軍艦奉行として華々しい人生を歩み出します。

諭吉は、幕府の翻訳方として雇われ、1862年には幕府の翻訳係りとして1年間ヨーロッパを見て回ります。この頃幕府内には二つの政治思想がありました。一つは幕府を中心とする政治思想であり、もう一つは、公武合体・雄藩連合による政治思想であります。勝海舟は、越前藩の松平慶永や横井小楠の影響を受け、公武合体・雄藩連合による近代的統一国家の創立を考えておりました。

諭吉もヨーロッパからの帰国途上では、幕府と雄藩の連合による政治体制が良いと考えておりましたが、帰国してみて攘夷思想が主流を占めている国内情勢に嫌気がさし、大君のモナルキー、即ち将軍の独裁を叫ぶようになるのです。この時期、同じ開国派でありながら、諭吉は幕府を支持し、海舟は雄藩連合を支持するようになります。諭吉は、薩摩・長州、(特に長州)が嫌いでした。

1866年になると、「長州再征に関する建白書」を幕府に提出して、「フランスからお金と軍隊を借りて、長州を倒し、次いで薩摩を倒し、京都の公家に睨みを利かせれば、幕府は怖いものなしになる」などと今から思えば時代錯誤的なことをさげぶのです。当然ですが、海舟はこの提案に大反対でした。

幸か不幸か、イギリス公使の横槍が入り、この計画は実現しませんでした。

そして長州との停戦交渉という尻拭いを海舟がやるはめになりました。

1867年に諭吉は二度目のアメリカ行きを果たします。期間は6ヶ月でしたが、一緒に行った上司の小野友五郎といつも激突し、この時から諭吉は、討幕派に転身しております。とって薩長の後押しをして幕府を倒す気はないのです。攘夷思想が強い薩摩・長州は幕府よりもきらいなのです。さてどうしたものかと悩みます。そして結局自分は中立の立場を貫きます。

一方、海舟は幕臣でありながら、幕府による政治に終止符を打ち、雄藩連合による政治の確立を着々と進めます。既に1862年に坂本龍馬と会い、龍馬を愛弟子にして、薩長連合を画策します。1864年には西郷隆盛とも会って、「これからは幕府の政治は無理であり、雄藩連合の政治を」と訴えます。1866年に遂に薩長同盟が成立します。これによって倒幕の下地が出来ました。

こうして1868年3月14日と15日の二日間にわたる海舟と隆盛の談判で、江戸無血開城が実現したのです。5月15日上野で彰義隊と官軍との戦いがあったとき、諭吉は三田の慶応義塾で我関せずで、ウエーランドの経済書の購読をしていました。一方海舟は、田安邸にいて命拾いはしたものの、自宅は官軍に襲撃されていました。

このように明治維新までの二人の功績をみると、海舟は華々しい活躍をしていますが、論吉は未だ学習期間中であり、とりたてて「掃除破壊と建置経営」に貢献したものはなにもありません。

ところが1868年（明治元年）以降になりますと、近代的統一国家の創立に対する二人の貢献度は180度逆転致します。

明治4年に新政府が廃藩置県を実施すると、論吉は新政府を改めて見直します。攘夷主義者と思っていた薩長を中心とした新政府が積極的に「掃除破壊と建置経営」を行う姿勢を目の当たりにみて、論吉の今までの考え方が180度変わります。積極的に新政府に協力するようになります。

明治5年には「学問のすすめ」を刊行し、日本国民に学問をして国民の独立を促し、それが国家の独立につながることを強調します。

又明治8年には「文明論の概略」を刊行し、西洋文明を積極的に取り入れ文明開化に貢献しています。

明治15年には時事新報社という新聞社を設立して、政府や国民に対してこれからの日本の進むべき道を社説で訴えます。特に朝鮮の文明化には力を入れます。その理由は朝鮮が西欧の植民地になれば、火の粉が飛び火して次は日本が西欧の植民地になる危険性があったからです。したがって日本にとっては、朝鮮が独立国家としてのしっかりした基盤を持っていてくれねばならなかったのです。朝鮮の文明化を阻害したのが中国（当時の清国）でした。

日本は明治27年に、朝鮮の文明化に反対する中国と戦争をします。これが日清戦争です。論吉は社説でこう訴えます。「これは文野の戦争である。文明化を進めようとする者（文明人）とそれを阻害しようとする者（野蛮人）との戦争である。」論吉は日清戦争を積極的に支持し、自ら一万円の義捐金を提供します。日清戦争には勝利しましたが、朝鮮の文明化は思うように進まず論吉は敗北宣言を致します。朝鮮にインフラ整備をしたり、学校を作り教育にも力をいれたり新しい制度も導入しましたが、朝鮮の文明化は失敗したのです。

原因は、朝鮮国民の心を捉えることが出来なかったからです。どこの国にもナショナリティーというものがありますが、朝鮮人のナショナリティーを変えることは出来なかったのです。論吉は明治31年9月に脳溢血で倒れ、その後小康を保ちますが、明治34年2月に長逝致しました。満年齢で66歳でした。

福澤論吉の三大事業は、1858年に慶応義塾を創立したこと、明治13年に交詢社を起こしたこと、この目的はいろいろな職業の人、いろいろな考えを持った人が一堂に会し、人間交際（コミュニケーション）を行い、智徳を進歩させることにありました。三つ目の事業は、先ほども申し上げましたが、明治15年に新聞社（時事新報社）を設立し、政府や国民に向けて日本の進むべき指針を発信したことです。

福澤諭吉の三大著書は、明治8年発刊の「学問のすすめ」、明治8年発刊の「文明論の概略」、明治32年6月に発刊した「福翁自伝」であります。

一方、維新改革で華々しい功績を残した勝海舟は、維新後はどうしていたのでしょうか？

海舟は、諭吉のように日本の為役に役立つような事は、殆ど何もしていませんでした。しかし、自分が幕臣としてこれまでお世話になった徳川一門と旧幕臣のために、「徳川共同体」の世話役を務め、明治6年には豪商に献金させ「徳川銀行」のようなものを設立し、旧徳川幕府一門の経済的援助をしておりました。

しかしなんとと言っても明治維新後の勝海舟最大の功績の一つは、明治31年に旧主徳川慶喜と皇室との和解の儀式を執り行ったことでもあります。これが実現すると、「俺の役目ももうこれで終わった。明日からの事は若い人に頼むよ」と言い残して、翌年（明治32年）1月に長逝致しました。

これまでは、明治維新前後の、海舟と諭吉の活動をお話してきました。最初にお話しましたように、新しい日本の誕生をめぐって、徳川幕府という古い建物を壊すのに貢献した人は勝海舟であり、その後近代統一国家という新しい建物を建てるのに貢献した人は福澤諭吉であります。

次に二人の確執の関係をみてみましょう。

1860年に咸臨丸で会ったのが初対面で、そのときの模様は既にお話致しました。二度目の出会いは明治12年であります。世の中は明治10年の西南戦争の影響で超インフレ時代になっており、慶応義塾も財政難にあえいでおりました。

諭吉は政府をはじめあちこちに慶応義塾維持資金の借用にとびまわりますが、思うようにいきません。そこでこともあろうに、徳川銀行の金庫番である勝海舟のところへお金の無心に行くわけです。

しかしもともと犬猿の仲ですから、海舟が諭吉にお金を貸す訳がありません。諭吉さんはどうして海舟のところになぞいったのでしょうか？

三度目の出会いは明治18年に洋学の某氏の27回忌の法要の時です。このときも、諭吉は海舟から維新戦争の時の対応について、ひどくなじられます。

この三度の出会いが起爆剤となり、後でお話します榎本武揚という触媒の力を借りて、明治24年に「瘠我慢の説」となって爆発することになります。

実は「瘠我慢の説」で標的としている人は勝海舟だけでなく、榎本武揚も標的になっているのです。「瘠我慢の説」にはどういうことが書かれているかと申しますと、勝海舟に対しては、彼が江戸無血開城ということをやっておりますが、徳川300年の歴史がある幕府が薩長に対して一度も戦わずして敗れた事は、三河武士の精神に反する事だと言うのです。しかもその後、薩長中心の新政府が出来るや、新政府に仕えて、伯爵になったり、勲章をもらったりしています。これも武士道精神に反する行為であるとして、厳しく糾弾しております。

榎本武揚は、北海道の五稜郭まで逃げ延びて、最後まで戦い遂に降参するが、その後はやはり新政府に仕えて、勝海舟以上に出世の道を歩んでいる事はけしからん。これも武士道に反する行為であると、罵倒しております。

では、明治維新での出来事なのに、論吉はなぜ24年も過ぎてから脱稿したのかという疑問がのこります。実は明治24年に脱稿するきっかけがあったのです

明治24年某月某日、論吉が静岡県清水市にある清見寺に参詣していた時、維新戦争でなくなった人の記念碑があり、そこに「人之食を食むものは、人の事に死す」と大書して、従二位 榎本武揚という名が記してありました。

要するに、「その人のお陰で飯が食えるならその人に死ぬまで尽くせ」ということでもあります。論吉は、幕府を捨てて寝返りを打って新政府に出仕した者がしやあしやあと、よくこういうことが書けるものだと憤慨したのです。

このようにして明治24年に「瘠我慢の説」を脱稿しますが、すぐには発刊せず、草稿を引き出しにしまっておきます。

しかし、幕臣時代に親しかった木村摂津の守と栗本鋤雲には、脱稿直後に極秘で草稿を渡します。

明治25年に、糾弾されている勝と榎本の二人には、これを公表するが何かご意見ありますかという手紙を添えて草稿を渡します。

すると、勝海舟から返書が来ます。これが又格好がいい文言なのです。「行蔵は我に存す。毀誉は他人の主張。我に与らず我に関せずと存候。各人へ御示御座候とも毛頭異存無之候。」

榎本からの返書は「今忙しくて意見を言う暇が無いのでいずれ意見します。」とありましたが、その後に至っても返事はありませんでした。

論吉は、海舟が世間に公表しても差し支えありませんよと言っているのに、なぜか公表しませんでした。海舟の返書の文言に圧倒されたのかもしれませんが。

そのうちに、栗本鋤雲に渡した草稿が、著者と主人公の名前を秘して世間に回ります。しかしそのニセ本は誤字脱字が多く、内容も正しく伝えていないこともあり、論吉は、原本を公にした方がよかろうと判断し、明治34年1月1日から3日までの3日間、「時事新報」に掲載する事にしましたのです。

ここで私が疑問に思うのは、論吉はなぜ海舟が活着しているうちに公表しなかったのかということです。海舟は明治32年に亡くなりました。論吉も公表した翌月の2月に亡くなっています。海舟が「公表して構いませんよ」と言ったのが明治25年です。あれから9年も引き出しにしまっておく理由はあったのでしょうか？

「瘠我慢の説」に関する世間の評価は、真っ二つに割れています。したがってこの議論はこのくらいにしたいと思います。

次に明治維新前後の四つの戦争に対する海舟と論吉の対照的な態度について

お話して見たいと思います。

最初の戦争は、1866年の第二次長州征討です。幕府と長州の戦争です。このお話はすでに致しましたので簡単に申しますと、諭吉は積極的な態度で戦争に臨みますが、海舟は幕臣でありながら、消極的な態度をとり、小栗勘定奉行や小笠原老中にも反対意見を述べるほどでした。

結果はどちらも勝敗がつかず、海舟が停戦交渉を行います。

二番目の戦争は、1868年の維新戦争です。幕府と薩長との戦争です。このお話も既に致しました。諭吉は幕府にもつかず、薩長側にもつかず、中立を保っていました。極めて消極的な態度であったと言えます。

海舟は幕府の最高幹部でありながら、幕府の威厳を保ちつつ幕引きをする事を考えていました。江戸城を一度も戦わずして官軍に引き渡すにしても、その後の徳川一門の地位を高く置こうと、官軍と粘り強く交渉しました。

この戦争に対して、海舟は非常に積極的な態度で臨みました。

したがって、徳川慶喜は官軍に捕らわれて首を切られることもなく、維新後も経済的に安定的な生活を送り、満年齢で76歳の生涯を送ることが出来ました。

三番目の戦争は、西南戦争です。

これは明治新政府軍と西郷隆盛らの旧薩摩藩士族との戦争です。

海舟と諭吉はどちらも、西郷隆盛には一目置いており、尊敬の念をもっていました。海舟が最初に西郷に会ったのは1864年で、この時に勝は、これからの政治は幕府だけでは無理で、幕府と雄藩連合でやらねばならないと西郷に主張します。このことはすでにお話致しました。初対面にも拘らず二人はお互いに、相手の人間としての器の大きさに心を打たれます。西郷は海舟という人間を高く評価し、このことを国許にいた大久保利通に宛ての手紙に認めておりますが、その中に、自分は海舟殿に「ひどく惚れ申し候」という一節があります。

二度目の会談が1868年3月のあの有名な江戸城無血開城談判であります。お互いが相手を尊敬している訳ですから、談判も順調に進んだわけです。

一方、諭吉の方は西郷とは生涯に一度も面識もありませんでしたが、お互いに相手を尊重しておりました。西郷は福澤の著書を愛読しその議論見識が卓越している事を賞賛しておりました。諭吉は西郷の人物やその精神を尊重して一世の人傑と認めておりました。両者の間には互いに敬慕の念があったと思われま

す。

その西郷が明治新政府に対して反乱をおこしたのです。諭吉はこの戦争に対して否定的態度を執りました。西郷のような維新改革に功績があった人物を傷つけてはならないと、戦争を止めさせるために四方八方に働きかけました。しかし時既に遅しで、間に合いませんでした。

したがって西南戦争が落ち着いた後、直ちに筆を執って「丁丑口論」を脱稿、明治

43年2月に発表し、西郷隆盛の明治維新での功績を称えました。

一方、海舟はこの戦争を冷ややかな消極的態度で見ておりました。海舟も新政府の専制政治には不満を持っておりましたので、互いに尊敬し肝胆相照らす仲であった西郷を応援したい気持ちは充分あったと思います。しかし海舟は動きませんでした。又戦争を止めさせようともしませんでした。どちらが勝っても良いくらいに思っていたのでしょうか？

したがって、海舟は自分が起たなかったばかりか、連日連夜、旧幕臣が反乱軍に身を投じるのを未然に防いでまわりました。

しかし西郷に救いの手を差し伸べはしませんでした。明治12年に南葛飾郡浄光寺境内に私費で西郷の記念碑を建立したり、西郷の遺児・寅太郎のために洋行留学費を宮中から出させるのに奔走したりして、西郷のために粉骨砕身し、真心を尽くしております。

四番目の戦争は日清戦争です。

福澤諭吉は日清戦争には非常に積極的な態度を執って臨み、これを強力に支持したことは前に述べましたので、詳細についてはここでは省略します。

いずれにしても、諭吉の軍事上の積極性は、領土的な野心によるものではなく、清国を決定的に叩かなければ、清国の朝鮮干渉を止められないという判断からきています。

一方、海舟は日清戦争反対論者で、この戦争には極めて否定的でした。

勝は1864年に軍艦奉行に任命された時以来ずっと、「日清韓三国提携論」を唱えて参りました。要するに、三国が連携して、西欧諸国のアジア植民地化に対抗しようという訳です。

諭吉は、日本、朝鮮、中国が西洋文明を取り入れて、それぞれの国が独立国家として西欧諸国に立ち向かっていこうと考えておりました。

実際問題として、明治維新前ならともかくとして、維新後それも明治27年当時は、日本による朝鮮文明化でさえ出来ないくらい、三国の国情は違っており、日清韓提携などは、実現不可能であったろうと思われれます。

以上四つの戦争に対する海舟と諭吉の態度を観ると、維新前の戦争と維新後の戦争は、二人が残した功績と大いに関係していることがわかります。

つまり、維新前の戦争では、その時代に功績があった海舟の態度が諭吉のそれよりも勝っており、維新後の戦争では、その時代に功績があった諭吉の態度が海舟のそれよりも勝っていることがわかります。

要するに、二人とも維新前後を生きて参りましたが、維新前に活躍した人、古い体質の日本を破壊した人は、勝海舟であり、維新後に活躍した人、新しい体質の日本を建設した人は、福澤諭吉であると言えましょうか。

本日はご清聴有難う御座いました。 (パチパチパチ・・・) 終